

[インタビュー]

原発はいらない

——ほんとうの自立をめざす祝島^{いわいしま}の人々

山戸 孝氏

上関原発を建てさせない祝島島民の会・びわ農家

28年にわたり原発反対運動を続ける、祝島。
原発阻止をステップに、ほんとうの自立をめざして
島づくりに励む人々がいる。

やまとたかし： 山口県上関町祝島出身。高校・大学と島外に出るが、2000年に帰島。びわ農家を営みながら、島の特産品であるびわ茶・ひじきなどをお年寄りと共に生産し、ネットなどで販売。原発反対運動においては若手のリーダーであり、美しい自然と豊かな漁場を守ることで地域経済を豊かにすることをめざしている。



祝島の現在

—— まず、祝島の概要について、お話しただけですか。

山戸 人口は、今の時点で約 500 人です。原発問題が浮上したのが 1982 年なのですが、その頃は 1,300 人くらいだったと聞いています。祝島もちろんですけど、上関町全体でも人口はかなり減っていて、3,500 人くらいです。一昨年あたりのデータでは、中国地方の中山間地の自治体のなかで、過疎・高齢化の進むスピードがいちばん早い自治体が上関町だったそうです。今、祝島には子どもはほとんどいなくて、小学生が 4 人、中学生がゼロですね。

島の産業は漁業と農業とで半々くらいですが、本業としては、漁業をされている方と農

業をされている方、わりとはっきり分かれていますね。もちろん、農業をやりながら船で魚を取る人もいますし、漁師をやりながらびわを作っている人もいますが、本分はわりとはっきりと分かれています。

漁師さんは、山口県漁協祝島支店の正組合員の数が、今 70 を切ったぐらいです。農業のほうは、祝島ではびわが特産品なので、びわ農家の生産部会の集まりがありまして、そこに入っているのが 43 人だったのでしょうか。かつてはみかんも盛んだったのですが、農協のほうが出荷などの受け入れをしなくなって、自前でさばかなければいけなくなったので、もうだいぶやめてしまいましたね。みかんなど柑橘類を作っている人はいますけれど、自家用が多くて、販売用で作っている人は、5~6 軒ぐらいになっていると思います。

また、観光産業というほどのものはないで



〈祝島と上関原発反対運動について〉

祝島は、山口県にある西瀬戸内海の離島で、本州・九州・四国を三角に結んだ中ほどにある。周囲約 12 キロ、人口約 500 人の風光明媚な島で、1 カ所に集中している集落部と島の反対側の三浦湾以外は、海岸線からすぐに切り立つ崖が続く。古来、海上交通の目印とされており、万葉集にも詠われている。

上関原発計画は、中国電力による、山口県熊毛郡上関町四代・田ノ浦地区への 137.3 万キロワットの改良型沸騰水型 2 基の原子力発電所新規立地計画で、1982 年に表面化した。建設予定地は、祝島集落の目の前、海を隔てて 4 キロ足らずの距離に位置する。地元住民を中心とした反対運動で計画は大きく遅れ、既に 28 年が経過している。2009 年 10 月、中国電力は予定地の埋め立て準備工事着工を「宣言」し、原子炉設置許可申請も国に提出したが、それ以降も、埋め立て準備工事は

半年以上にわたってストップしている。

「上関原発を建てさせない祝島島民の会」は、上関原発に反対するというその一点でまとまった島民の、自立した組織として運営されており、非暴力直接行動で中国電力に対峙し続けている。週 1 回の月曜定例デモを、特別の事情のない限り継続しており、現在 1,070 回を超えている。

島では、原発問題を契機として、若い人たちが島の運営の中核を担っており、また、隣近所の助け合いも機能している。現在は島民の救急時の搬送体制を確立し、高齢者福祉・介護の充実に向けた取り組みもはじまっている。ここ数年は、従来の農水産物加工を通じての島おこしへの取り組みに加え、U ターン者による島の自立に向けた取り組みが活発になってきており、さまざまな島の歴史文化遺産も注目を浴びてきている。

（「上関原発を建てさせない祝島島民の会」
配布資料より、抜粋・編集）

すけれど、旅館が2軒、民宿が1軒ありまして、最近はかなり埋まっていることが多いですね。釣りが目的のお客さんが多いです。最近増えてきたのは、原発問題などの関係で来る人、それプラス、島のなかの観光で来る人です。祝島に独特の石積みの練堀、NHKなどでも何回か取り上げられた「平さんの棚田」という、お城のような斜面にできている石垣の棚田ですとか、また、北海道からUターンで島に戻られた氏本長一さんという方がやっておられる豚の放牧が、今注目されていますので、それを見に来る人もいます。どちらかと言うと、のんびりとした時間を楽しむような観光が多いですね。

反対運動の島に育って

——上関原発反対運動についてのお話に入っていきますが、山戸さん自身は反対運動とどう関わってこられたのでしょうか。

山戸 私が祝島に帰ってきたのが10年前なのですが、原発反対運動は28年以上続いていますので、実際には3分の1しか知らないというところもあります。ですから、あまり大きなことを言うと、島の人たちに怒られてしまいますが……

——子どものときから、反対運動の島という環境にいらっしゃったわけですね。反対運動というものが生活のなかにあって、それをどのように見ながら成長されたのでしょうか。

山戸 そうですね、子どもの頃は、原発への反対・賛成そのものにはあまり興味はなかったです。大人の人たちが電力会社と闘っているというのは分かっていたけれど、大人にも、子どもはこういう話に踏み込むなとい

うのもありましたし、子どもも子どもで、親が推進派の子もいるし、私のように親が反対派の子もいますから、子どもの世界に賛成・反対という立場を持ち込まないようにしていました。

ただ、島の人たちがあれだけ一生懸命やっているし、自分の親も一生懸命やっているから、原発はあまりよくないものだというイメージや感覚はありましたし、その類の本や資料も家にありましたので、中学、高校の頃にはちょっと読んだりはしましたね。でも、反対運動に対して主体的に、こう思うとか、どういうかたちに関わるとか、そういうのは子どもは一切なかったです。

それは、高校に行ってもあまり変わらなかったですね。島外の高校に行ったんですけど、同じ県内ですから、たとえば原発問題のニュースで、「上関原発を建てさせない祝島島民の会」の代表を務める私の父親がインタビューを受けている場面が出たりすると、次の日に学校で友だちから「出てたね」と言われることはありましたが、それぐらいです。高校生の頃は、社会や政治のことを真面目に語るのはちょっと気持ち悪いとか、そんな感じもありましたからね。

ただ、高校の同級生が反対の署名集めを自分たちでもやってみようと言いはじめたので何回か一緒にやったり、また、原発問題について勉強したいから話を聞かせてくださいということで、6~7人ぐらいのグループで中国電力の支社に行って、担当の人に話を聞いたりしたことはあります。

高校を卒業して、今度は大阪の大学へ行って、卒業後に大阪の小さい会社で少しだけ働きました。半年ぐらいして、2000年の夏に、祝島で4年に1回行われる「神舞^{かんまい}」という、

千数百年続いているお祭りがあったんですが、踊り手が足りない、と。ちょうど、その時やっていた仕事は将来健康に影響が出そうな仕事で、長く続けられる仕事ではないと感じていたこともあって、それなら島に帰ろうかと思ったんです。卒業してまだほとんど働いていないけれど、神舞は4年に1回しかない大事なお祭りだから自分も参加したいし、若いからまあいいやと思って、それで島に帰ったんです。

その2000年の神舞が終わったあと、もう1回島を出て仕事を探そうかと思って、何件かあたったりもしていたのですが、2001年のちょうど春ぐらいに、びわを作ってみようということになったんですね。祖父がびわ農家だったので、びわの畑がまだ残っていたんです。祖父が亡くなって7〜8年経っていたのですが、島の人がときどき手を入れてくれていたので、畑がまだきちんと生きていました。雑木などをしっかり刈ればびわが採れるだろう、せっかく島にいるのだから、じいちゃんのびわ畑ぐらいは1回ちょっと拓いて、びわを食べてみようか、と思ってはじめてんです。

それで畑を見られるかたちにして、できたびわを食べたら、かなりおいしかった。これだけおいしいのなら、やり方によってはびわ農家で勝負できるかもしれないと思いました。

もともと、何の根拠もなく、30歳ぐらいになったら島に帰ってこようとは思っていたんです。ある程度社会で働いて経験を積んで、30歳ぐらいになって島へ帰ってきたら、いろいろやれるんじゃないか、と。でも、神舞をきっかけに、思いがけず早く帰ってきて、びわを作ってみたことで、そのおいしさ

も実感できました。そうしている間に、30歳では、ひょっとしたら遅いかもしれない、やるなら早いうちがいいかもしれないと思ったんです。

もちろん原発問題も含めてですが、島の高齢化が進んでいくなかで、産業をどうやって立て直すか、これから生きていく人間がそこで働く場をどうやって作るか。そう考えたときに、早めに帰ったほうがいいと判断して、最終的にはびわがきっかけとなって、島で生活してみようと決めました。

——それから反対運動にも具体的に取り組まれるようになったのですか。

山戸 本気で島に住もうと思ったら、やはりそうなりますね。遠くにいたときにも、自分の信じている人たち、自分の好きな人たちが反対運動をしていることに対して、それを間違っているとは思いませんから、応援している気持ちはすごくあったんです。けれど、上関に原発を建てさせないために、具体的に自分に何ができるかまでは考えることがなかった。

ただ、大学へ入って、それなりに自分で勉強したりして、原発というのは、電力会社や政府がPRするほど安全でもなければ、「将来はバラ色」みたいなエネルギーではないということは、学生レベルではあるけれど、おぼろげには知識として持っていました。そういうなかで島に帰ってきて、今度は、エネルギーの問題というよりは、実際の地域の問題として接することになったわけです。原発そのものもそうですし、原発のような大きいものが持ち込まれようとしたときに、地域にどういう影響が出るか、地域がどれだけ歪められるか。

実際に帰ってきてそれに直面すると、例え

ば、自分は賛成でも反対でもない、中立だというような、ある意味きれいごとにはもう通用しない世界だと思いました。島のことを考えたら避けて通れない問題に対して、中立とか、賛成でも反対でもないと言って避けている人が、こういうことをしようとかが、こういうことをしたら地域のためになるなどと言っても説得力がない。

—— 反対運動にどう向き合うかということ、真剣に受け止めなければいけない。それがあった上での、祝島のこれからということになるのでしょうか。

山戸 反対運動をするために生きているわけではないけれど、生きるためには向き合わないといけない問題から逃げているようでは、やはり駄目でしょう。

ほんとうに祝島で生きていくつもりだったら、絶対に原発は建てさせてはいけないというのを、島に住んだときによく実感として感じて、それまではデモに参加したことはなかったのですが、参加するようになりまし、父親の原発反対運動の仕事も手伝いはじめました。また、祝島の人でパソコンが使える人は、当時はほとんどいなかったのですが、私はパソコンが使えたので、そうところでも、自分が役立てる部分は役立てていきたいと思いました。

ですから、原発問題について、否が応でも本気で向き合わざるをえないような状況になったのは、やはり島に帰ってきてからですね。

県や中国電力との闘い

—— 具体的な反対運動のお話に入っていきます

が、2009年の秋以降、中国電力との間でかなり大きな動きがありましたね。

山戸 2009年9月に、中国電力は、埋め立て工事をはじめめるためにブイ（灯浮標）の設置作業をしようと動きはじめたので、それに対して我われは阻止行動、抗議行動を行いました。

ただ、埋め立ての問題に関しては、さらに2008年10月に遡って、山口県知事が中国電力に埋め立て許可免許を出したのがスタートです。免許を出してから1年以内に着工しなければいけないので、2009年の9月に、ぎりぎりになってブイ設置作業をはじめたのです。

そもそも普通は、免許を出したら、すぐには取りかからないとしても、多少は余裕をもってはじめるはずですが、期限があと2カ月ぐらいしかないような状況のなかで、ようやく工事をはじめたんです。

それまでに、中国電力の環境調査が不十分で、カムリウミスズメなどの天然記念物の鳥がいることを全く把握しておらず、「長島の自然を守る会」など民間の自然保護団体に指摘されて慌てて再調査するなどといった、不備の積み重ねがあったのですが、にもかかわらず、県は埋め立ての許可を無理やり出したものですから、すぐには着工できなかったのでしょう。

—— 原発を建てる上で、知事の許可というのはかなり重い判断ですね。

山戸 そもそも山口県知事は、2001年に、上関原発計画に関する国からの意見照会で、賛成の意見を出しているんですが、それには、安全確保のためなど6分野21項目の要請事項を付しているんです。その21項目を全部クリアしないと、県としては許認可権限

を差し止める、つまり原発計画に対して県としてストップをかけることがありうる、というようなことを言っています。それが通るのであればすごくいいんですけど、結局、県しか許認可を出せない、それがないと計画が進まないという状況があって、ほとんどクリアされていないまま、あっさり埋め立て免許を出したわけです。

あの知事意見は何だったのか、と思いました。知事が出した意見に対して国や電力会社が誠実に対応しない、あるいは、明らかに不備があっても県としてはもうストップのかけようがない、文句は言えるけれど法律的にストップをかける手段がなくなっている。そうならば、結局、あの知事意見はパフォーマンスで、建前でしかなかったんじゃないか、と。そういった不信の積み重ねが、2008年10月に許可免許が出された時点で、まずあったんです。

そして、2009年9月に、1年以内という着工期限ぎりぎりになって、中国電力が必死になって工事をはじめました。こちらとしても、漁業権の問題でも補償金は受け取っていませんし、地元の合意も得ていないのに工事をするのは納得できないので、きちんと抗議をしなければということで、ブイを積み出す埠頭のところに漁船をずらっと並べて、抗議行動や阻止行動をしていました。

そうしたなかで、それが長期化していった、10月8日に中国電力は、ブイを置いてある埠頭とは全く別の場所から違うブイを運んできて、だまし討ちのようなかたちで2基設置したんです。そして、県に着工を届け出て、県も了解しているんですね。

とにかくそういうかたちで、着工はしました。でも、まだ2基でしたので、こちらとし

ては、少なくとも全部ブイを打つまでは向こうは作業に取りかかることはできない、工事区域を示さないことには工事ははじまらないわけだからということで、抗議をそのまま継続して、泊まり込みで活動しました。

中国電力もいろいろとやってきましたけれど、なかなか設置できないという状況のなかで、結局、10月29日の夜中から夜明けにかけて、最初の2基と同じように、残りの7基も別の場所から運んできて、本来のものとは違うものを設置したんです。これで工事区域を示しました、と。

中国電力はあくまでも、設置したブイがほんとうのブイで、我われが阻止行動や抗議行動をしていた場所にあったブイはスピアだと言っています。でも、もともとのブイはきちんとしたものだったんですけど、今、実際に浮いているものはかなり安っぽくて、使い古されたものだったり、アンカーとブイをつなぐチェーンのところが磨耗していたりします。ですから、案の定、今年3月の大風ときに、1基流されています。岸のほうに打ち上げられたからよかったけれど、あれが漂流していたらほんとうに危ない。危機管理ができていないし、明らかに自然と海をなめています。

11月に入って、中国電力が、今度は埋め立て区域のなかで作業をはじめようとしたので、我われはまた抗議を行いました。座り込んだり、海のなかで船を並べたり、予定ポイントらしきところに船を停めてひたすらそこにじっとしているなどして抗議したんですが、11月8日に、シーカヤックに乗って抗議行動に協力してくれている若い人たちのなかから、負傷者が1人出ました。負傷者は作業員や中国電力社員らを告発して、現在、書



類送検されている段階です。

こちらとしては、どれだけ激しい、厳しい抗議をしても、少なくとも、作業員、警備員、中国電力の社員など、相手に対して暴力は絶対にふるわないというのが、最低限のルールだと思っていました。でも、向こうは作業をするためだったら、暴力的な行為を平然と使ってくるつもりだということがはっきり分かりました。

我われは、もちろん暴力を使うつもりはないですし、浜で座り込みをしたり、船を寄せたりするだけで、作業員を押さえて作業できないようにしたりは、絶対にしません。あくまでもそこにいるということと、あとは言葉できちんと抗議をしたり、あるいは、なぜここでこういう作業をしなければいけないのか、説明を求めたりしていました。

結局、作業が進まないものですから、中国電力は12月に、シーカヤッカー2名と祝島島民2名を相手に、4800万円の損害賠償を求めて訴えました。また、中国電力は祝島の漁業者に対して妨害行為の禁止を求める仮処分を申請していたのですが、今年1月、それを認める決定が出ると、それに合わせて、もし作業を妨害したら1日につき約940万円を支払えという、間接強制を求める訴えを起こしました。地裁はそれを認めたのですが、500万円に減額しています。その算出根拠は示されていなくて、なぜ940万円だったのかも、なぜ500万円に減ったのかも、はっきりしない。今は、高裁に特別抗告している状況です。

このように、埋め立て区域のなかで妨害行為をしたら、中国電力がお金を請求してくるような状況になりつつも、でも、こちらとしては別に納得しているわけではないですし、

漁師さんも補償金を受け取っていないのに漁業権を奪われるのは、到底納得できない。そもそも、生活するために営んできた漁を一方的に奪われることは、ほんとうに死活問題になりますから、それ以後も浜辺ですずっと座り込みなどをして、地元の理解も得ないうちに無理やり作業をするのを認めるわけにはいかない、自分たちの生活を奪うようなことはしてくるな、という訴えをずっと続けています。

環境、漁業権、土地所有権 ——問題は多く

——今のお話のなかで、環境問題のことが少し出てきました。

山戸 私も専門家ではないので、環境面については、「長島の自然を守る会」や、そのほか三学会（日本生態学会、日本鳥学会、日本ベントス学会）の方々ですとか、専門の方がきちんと取り組まれています。

少なくとも地元の人間として、環境面に関して感じていること、思うことと言えば、最初の環境影響調査で中国電力が調査をして、原発を作っても環境に大きな影響はありませんと言ったのですが、その矢先に、スナメリというクジラの仲間についてのデータが中国電力の調査からすっぱり抜けていることがわかったんです。島の人は、スナメリなんていうのは日常的に見るものだから、そんなに大事なものとも思っていないし、それほど注意はしていなかったんですけれど、長島の自然を守る会の人々が指摘して、それで再調査がなされたりしました。

ですから、この環境問題について祝島の人

間が感じたのは、あまりにも当たり前にあるがゆえに、祝島の人間——上関町に住んでいる人間全部とも言えますけれど——は貴重だとか大事だとか感じていなかったけれど、外目から見たときに、これだけ大事なものがここにはあったんだということ、そして、中国電力というのはそれを平然となかったことにして無視しようとしているということです。

——さきほど少し触れられましたが、漁業権の問題もクリアされていません。

山戸 祝島の漁業権の問題については、補償契約の無効確認を求めた裁判では、最高裁で我われの敗訴が確定しましたが、実際に祝島の漁師が補償金を受け取ったかどうかと言ったら、受け取っていません。あれから2回ほど漁協の総会にかけられて、2回とも受け取らないということで決議をしています。

そういった状況にあるにもかかわらず、県が埋め立て許可免許を出したというのがまず間違いで、それに対して祝島の人たちはすごく憤っているんです。地元の実情をきちんと把握せずに電力会社におもねるようなやり方で、山口県は自分のところの県民ではなく、企業や国など上しか見ていない。もっと下を見るべきだということで、たいへんな怒りをもっているわけです。

——ほかに、大きな問題としては土地の問題がありますね。未買収地があったり、神社の敷地があったり、また、田ノ浦遺跡という縄文時代の遺跡があったり。

山戸 もともとこの計画では、敷地はもう少し陸のほうを削っていて、海を埋め立てる範囲は少なかったらしいんですが、買収できていないので海に張り出してきていますし、また、原子炉設置許可申請のときの計画では、

未買収地（反対地主の共有地）が、建設予定地にすっぽり含まれているんです。

2009年12月に、反対派地主の共有地で、炉心から250mのところに、新しく監視小屋を作りました。そこに住民登録をした居住者が2名います。また、それとは別の共有地に、20人以上が宿泊できる、太陽光発電設備を備えたログハウスもあります。2002年、反対運動がはじまって20年の節目のときに、全国からいただいたカンパで建てたものです。そこにも、住民登録をしている住民が2名います。そういう問題もあります。

共有地は反対派30名ほどで共有しているので、中国電力に買収される可能性はまずないですし、所有者には祝島の人間も結構入っているんですが、少なくとも私が知っている範囲では、中国電力のほうから「土地を買わせてくれ」というような働きかけがあったことはないようです。ですから中国電力は、説得する、理解を得るというのを最初から放棄していて、反対している人たちはもうほうっておいて無理やりやる、いかに無理やりやるか、とでも言うのでしょうか。

3～4年前ぐらいに、中国電力の人が詳細調査で作業をしているところに、抗議に行ったんですが、そのときに祝島の人が「私ら祝島の人間がこっだけ反対しよるのに、ほんとうに原発できると思うちょるんかね」と聞いたんです。そうしたらその人は、「祝島の人が諦めてくれたら原発はできます」とはっきり言ったんですよ。

やはりそのときに本音が出たと感じました。要するに中国電力のスタンスというのは、反対している人たち——祝島の人たちだけではなくて、原発を作るなど言っている人たち——に対して、誠意と熱意を持って説明

して、理解を得るのではなくて、既成事実を積み重ねていって、もう反対しても仕方がないところまで追い込んで、諦めさせていくというかたちなんです。

そういうやり方に対して闘ってきわけですが、これは私個人の考えですが——島民の会としての考えにも近いとは思いますが——、祝島の反対運動というのは、原発を建てさせないというのがもちろん目標ではあるんだけど、ある意味、1つのステップだと思っているんです。原発の建設を止めるというステップがあって、さらに次に進むための。

具体的には、島が充実して、きちんとこれから子どもを生み育てていけるような環境を守る、あるいは、今非常に厳しいですけど、経済的にもそれが可能になるような状況を何とか作っていく。島が自立するという目標があって、そこに対して原発はほんとうに大きな障害ですから、何とか乗り越えようとしていると、私はとらえています。

島外との関係を築きながら、島おこし

—— 原発反対運動から少し離れまして、祝島では、島おこしにもいろいろと取り組まれていますね。

山戸 私が島に帰ってきたのが10年前ですけど、それ以前から、もっと言えば原発問題が始まる前から、いろいろな努力はしてきているんです。離島というのは、ある面では恵まれていて、でも、ある面では厳しい環境です。いちばん厳しい面を言えば、単純に、島で作った物産を外に出すだけで、よその地域に比べて時間も費用もかかってしまう

という面があります。そういった不利な面を克服するために、漁師も農家も努力はしてきました。

漁師で言えば、一元集荷をして、決まった相手にきちんと定期的に送ることで、魚の値崩れを起こさせないようにするとか、漁師さんのコストの削減を図るというのは、原発問題が起きるずっと前からやっていることです。

農業にしても、例えばびわの無農薬栽培も、みかんからびわに切り換えてすごくよかったと思います。通常ですと、びわの木は非常に高く伸びてしまうので、ある程度高齢でも作りやすい低木栽培という方法でやっているんです。そういう技術的な面で努力したり、無農薬栽培することで商品価値を高めました。

そうしてやってきたなかで、原発問題が起きたわけですが、結局、中国電力が言っているのは、原発が来ればたくさん町にお金が入るから生活が豊かになる、ということなんです。自分たちとしては、豊かさの価値観がもともと違う。海を守るほうがよっぽど豊かな生活だと言いたいけれど、現実問題として、やはり経済的にも回していかないとけない。それなら、自分たちの知恵と努力で、今よりもさらに収入を増やしていくとか、今商品になっていないものを商品にするということで、びわ茶や、水産物加工品の生産がはじまったんです。

はじめたのは、びわ茶は女性グループ中心で、生産加工物は漁協の取り組みでしたが、実際にメインで現場を回していたのは、やはり島の女性たちですね。

私が島に帰ってきたときに、最初に採れた

びわを食べて、おいしいからいけるんじゃないかと思ったと、さきほど話しましたが、では実際やってみたところでびわだけで食べていくのは難しいだろう、と。そうなったときに、やはりびわ茶などの加工品を作っていくことで、収入を増やそうと思ったんです。

販路は女性たちがすでにある程度持っていますから、自分が新しく入ってやれることは、今までにない販路を開拓することでした。それまでは、営業の方法と言え、とにかくいろいろなところにファックスを送ったりしていたようです。その頃、2001年か2002年で、だいたいインターネットが普及しはじめて、雨後のたけのこみたいにホームページがたくさんできていました。それで、ほんとうに私も素人で、パソコンがちょっといじれる程度でホームページも作ったことはなかったんですけれど、商売もかかっているし、ネットで販売してみようと思ったんです。

そうすれば、都会など人が多いところに店舗を持つようなコストをかけなくても、祝島のような離島にいても商売ができる、というのがありました。今考えれば常識的な考え方ですが、その頃は、そういう考え方が走り出して、楽天市場などもようやく回りだしたぐらいだったでしょうか。それで私もやってみたというかたちです。

都市の生協さん、コープさんですとか、自分のところで会員を持っている消費者グループ、個人でショップをやっている人などから引き合いをいただいたり、あるいは、大きいところのバイヤーさんが個人ショップで祝島のひじきなどを見て、品がいいから取り扱わせてほしいということで取り引きが広がったりですとか、そういうかたちで今やっていま



北海道からのリターン者、氏本長一さんがはじめた豚の放牧。豚の雑食性と、「鼻耕」という鼻で土を掘り返す能力が、耕作放棄地を再開墾してくれる。循環型農業として、各方面から注目を集めている。

す。ここ数年は、かなりいろいろな販路が広がってきていますね。びわ茶は商品が足りなくて、お客さんにお待ちいただいている状況です。

基本のスタイルとしては、今島にあるもので、島のなかでは換金性・経済性のあるものとして見ていなかったものに手を加えたり、ちょっと視点を変えて見てみると、新しい価値が生まれる。びわの生葉のネット販売もそうです。島には使っている人はあまりいないのですが、ネットでは売れていて、民間療法などに使われています。視点を変えて、実際にある島の財産を自分たちできちんと位置づけて、産物、産業にしていくという考え方が基礎ですね。

もう1つ言いますと、今島にないもの、昔

はあったけれど今はないものを、よみがえらせる、あるいは新しく作りだす、という取り組みもはじまっています。冒頭のほうで少し触れたように、北海道からUターンで島に戻ってこられた氏本長一さんが豚の放牧をされていますが、祝島には昔は豚がいましたから、まさに昔はあったけれど今はないものを復活させる取り組みと言えるでしょうか。

氏本さんの豚の放牧は、まだ個人レベルではありますが、かなり回っているようです。それが個人の方の商売で終わるのか、祝島という地域のほんとうの産業として根づくのかどうかというところが、また分岐点になると思います。おそらく、もしこれから新しく豚の放牧をはじめるとしたら、UターンとかIターンとか、そういう人がそこに加わるようになるのではと思います。

私が今は始めている新しい取り組みとしては、祝島には未利用の海藻がたくさんあるので、そういった、祝島で物産として意識されていなかったようなものを、どうやってお金に換えるようなかたちにしていくか、知恵を絞っています。

さらにもう1つ新しい取り組みとして、ものだけではなくて、やはり人手が足りないという状況があるなかで、どうやって人を確保するかという面も考えていかないといけません。今、広島から移ってこられて、一軒家を借りて住んでいる方がいます。ご本人は、できるところまでここでやってみたいとおっしゃっているので、こちらとしてもずっといてくれたらうれしいですから、いろいろサポートはしていくつもりですが、まだはじまったばかりです。

そういったかたちがいちばんいいですね。入り口として、例えば、農業や漁業の仕事を

島外から来た人と共同でやることで、こちらでも人手が足りない部分はフォローしてもらえますし、来た人も体験することができます。お金は払えなくても、お土産でひじきを持って帰ってもらうとか、生産物でのお返しはできますから。その生産物を持って帰っていたいて、体験とともに、周囲に情報として発信してもらえれば、そこから祝島という存在が広がって、またこちらに何かしらの——人なり、ものなり、情報なりの——リターンがあるのではないかなと思うんです。

祝島のなかだけで経済やものが回って終わるのではなく、島と島の外がうまく関係しながら共存していけるような、お互い尊重しあって、お互いがいるおかげで豊かに生きていけるというような、そんな関係性を作りだしていけないと、こういう小さい地域は生きていけないでしょう。

サッカーなどでサポーターという言い方をしますが、サポーターはプレイには参加しませんよね。サッカーのフィールドには入ってこない。私がイメージしているのは、サポーターとはまたちょっと違ったかたちで、祝島がフィールドだとしたら、フィールドに入ってきてもいいよ、むしろ、もう入ってこいよというような、サポーターがいつの間にかプレイヤーになっているような、そういった関係性です。実際、今、そういう関係を作るように取り組んでいるところです。

原発反対運動から、もっと先へ

——今年、祝島を取り上げた2本の映画（『ミツバチの羽音と地球の回転』[監督：鎌仲ひとみ]、^{ほうり}『祝の島』[監督：瀬瀬あや]）が公開されまし

た。祝島の情報を発信して、知ってもらうためのよい手段、きっかけになっているのではないかと思います。が、地元では、どのように受け止めていらっしゃるんですか。

山戸 それはありがたいですし、うれしいですし、撮影にも積極的に協力しました。ただ、作品である以上、一面を切り取っているわけですから、その一面だけを見て祝島や上関原発反対運動というものを理解されると困ってしまう、という部分も、どうしてもあるの

ですが、それでも、運動全体や、祝島の将来に向けて考えたときには、はっきりと大きなプラスです。何より、祝島の人間の手ではなかなかできないことです。これはほんとうにありがたい。

2人の監督が、ある意味、人生のかなりの部分をかけてやられたことですから、こちらとしてはその覚悟を真剣に受け止めなければいけないし、受け止めたからこそ、いろいろ協力しています。

こちらの手の及ばないというか、やりたくてもやれない、あるいはやろうとすら思わなかったようなことを、島外の人たちがいろいろ提案をして、行動に移してやっていくなかで、きちんとこちらと協同して、うまく連動しながら運動を広げていくというのは、ほんとうに大きな力になると思います。

映画に限ったことではないですけど、こうやって祝島の情報を広げてくれたことに対して、それをどう生かすかというのは、結局、祝島の人間にかかっていると思いますね。

——さきほど、上関原発を止めるのは1つのス



山戸さんのびわ農園に案内していただいた。収穫の季節は5～6月だ。

テップにすぎない、というようなことをおっしゃいましたが、お話を聞いていて、反対運動にとどまらず、それと同じくらい、もしくはそれ以上のエネルギーを、島づくりのために費やされていると感じました。ですから、原発計画を止めることができたなら運動は終わり、ということには、きっとならないのではないかと。

山戸 ならないですよ。原発の反対運動というのは、どちらかと言うと、本気で島で生きていく上ではやらなくてはいけないことなんですよ。やらなくてはいけないことが終わったら、今度はやりたいことをやる。それもまたある意味、やらなくてはいけないことでもありますし、原発反対運動も、今やりたいこととしてやっていることでもありますし。

反対運動と島おこし、どちらが上、下というのはなくて、ほぼ一体ではあるんですが、あくまでも原発を止めるという1つの成果を出したあとで、それをもって、さらに前へ進んでいくという意志は、きちんと秘めていると思います。

(2010年8月4日、祝島にて。
インタビュー：新垣千佳子・和田ひかり)